

家住利男 捉える形

IEZUMI Toshio - Discovering Form

はじめに

家住利男(1954-)は、板ガラスを重ねる、接着する、削る、磨くという工程を経て作品を制作している。石彫に用いるハンドグラインダー(1)をガラスの加工へ応用するという家住の発想は、素材と自身が一体となる創作行為を生み出した。家住は削られてゆくガラスの感触を確かめながら、直方体のガラスの塊に手探りで形を見つけ出そうと試みている。家住の手により、削り磨かれたガラスの表面は水面のようにゆらぎ、豊かな広がりや量感をもたらされている。さらに光が透過し反射することにより、形には不可思議な像が映し出されてゆくのである。存在そのものが謎に満ちた家住の造形について、本稿では「積層による形」「生じる形と映し出される像」「削りから得られる感触と形」という3つの視点から迫り、30年にわたり変化しつづける家住のユニークな作品世界をみつめてゆきたい。

積層による形

東京ガラス工芸研究所において、家住は吹きガラスやキャスト、ガラスのカット、エナメル絵付け、サンドブラストによる板ガラスの加工などを学んだ。板ガラスは薄いもので2mmから2cm程度まで幅広い厚みがあり、何枚も重ねて積層すると枚数の分だけ濃く緑色を帯びる。重なり合うことで生まれる深く澄んだ色に興味をもった家住は、板ガラスという素材そのものに魅かれ作品制作を始める。

トラバーチンという白く軽い石と板ガラスという二つの異素材を組み合わせた《表面》(1984年)の作品制作において、家住は屈折率の少ないシリコンで接着することにより、内部を覗きみると、ある角度からは石の断面が消え、代わりに無限の空間が現れることを発見する。積層により生まれる内部空間の不可思議な現象に触発され、家住は板ガラスの積層による作品制作に本格的に着手していく。1989年に制作された《光と水》はカットした板ガラスを重ねて接着したブロック状の塊を組み合わせ、垂直に積み上げた作品である。その佇まいは近代的な建築物を想起させる。また、《光と水と空気》(1990年)では、サンドブラスト(2)によって一部をすりガラスのように曇らせた板ガラスを重ねて、接着することにより作り上げたブロックを、垂直に積み上げて完成させている。本作は、すりガラスの範囲を少しずつずらして板ガラスを重ねることで、形の内部にグラデーションを伴う奥行きが現れる美しい作品である。この二作品はマケット(試作品)でもあり、実際の作品を制作する前段階で作られる。家住の制作では、デッサンやスケッチを行わない代わりに、まず自らの発想を小規模のマケット(試作品)に反映させ、実寸大に起こしてゆくのである。このような過程を経て制作される作品の中には、大きなもので4mに達する作品もあり、屋外にも設置される。

(1) ハンドグラインダーについて家住は以下のように記述する。

圧縮空気や電気駆動手持ちのグラインダー。金属、石材、ガラスなどあらゆる種類の素材の先端工具を変えることで切断、研削などの加工が行える。

(2) 高圧のエアーで砂をガラスに吹きつけ、すりガラス状に表面を加工したり、浮き彫りなどの彫刻を施す技術。

それまで家住は、積層のブロックを組み合わせ、垂直に立ち上がる形の作品を制作していたが、1991年に制作した《光と水と空間》においては、ブロックを水平方向へと組み合わせ、平置きする作品を生み出した。左右非対称に組み合わせられるブロックによって全体は有機的に見え、増殖し続ける細胞をも思い起こさせる。

作家は、自らの視点を垂直から水平へと軽やかに転換させ、造形の印象を大きく変化させたのである。

このように、家住は1980年代後半から数年間、工業製品として生産される板ガラスの、無機的で硬質な素材感や透明性という特徴と向き合いながら作品を制作してきた。板ガラスを積層してゆくシンプルな行為によって現れる、深く澄んだ色、奥行ある内部空間を備える形、無限の組み合わせによる形の広がり可能性を見出したのである。一方で家住は制作を進めるなかで、自らの造形表現に新たな展開を求めるようになってゆく。

生じる形と映し出される像

1991年ごろから、家住は石彫の制作で研削や磨きに用いるハンドグラインダーをガラスの加工に応用し、ガラスの表面を削り磨く試みを始めた。

「初めはガラスを削るのが本当に大変だった」と彼は振り返る。《でっぱりとへこみ》(1992年)の作品では、ガラスの表層をわずかに削り磨き、緩やかな凹凸を生みだしている。これにより、ガラスの表層には気泡のような形が浮かび上がり、その周囲がゆらいでいるように見える。積層の内部に熱線反射板ガラスという光を反射する特殊なガラスを加え、光は透過することなく凹凸あるガラスの表層をなぞるように反射する。タイトルに付されるように「でっぱりとへこみ」は、鑑賞者に造形の表面が“でっぱって”いるのか、あるいは“へこんで”いるのかという認識をあいまいにさせ、家住が生じさせる形の錯覚に視点を彷徨わされるのである。家住は削りの深さや範囲に変化をつけることで、様々な動きを持つ凹凸を生み出し、光の透過と反射により形に錯覚が生じる作品を制作した。また作品を立てるあるいは平置きする、裏と表を返す、縦と横を転回する、壁面にかけるなど作品そのものの置き方についても様々なアプローチを試み、視点を变えることで多様な表情をみせる形に、彼は次なる表現の可能性を切り拓いてゆく。

1995年に制作された《表面》は、3点の直方体によって構成される大規模な作品である。板ガラスによって積層された表面には、円や半円状のようなかたちが浮かび上がって見える。屋外に平置きし展示された本作は、光の反射によって移ろいゆく空の様子や揺れ動く木々を円や半円状の形に沿って映し出し、自然と流れゆく時間さえも形に取り込んでいる。また、同年に制作され同じく《表面》と

題される作品は、壁や什器に立てかける大型の彫刻である。表面の全体にあらわされた水面のようなゆらぎによって、映し出された周囲の環境は複雑にまじりあい、鑑賞者の認識を混乱させる。これらの大規模な作品は、家住が生じさせる表面の凹凸と、作品の置かれた環境の中で起きる事象とが融合することによって、刻一刻と変化を見せてゆく。

1996年から展開される「Projection(プロジェクション)」シリーズは、「表面」シリーズを掘り下げ、壁面へと作品を配し空間を映し出す作品群である。それまでの直方体を基本とした形は、円や楕円形、長方形の形に加工される。鏡面のように丹念に削り磨かれた表層ではあるが、鏡のように正確な像が映し出されることはない。家住が削り磨いた、多様な凹凸やゆらぎにより有機的に波打つ表層が映し出す像は、伸びたり、縮んだり、膨らんだりするなどし、空間の中に在るあらゆる事象を動的に混在させる。通常、私たちは鏡を覗き込み、そこに自身の姿を認める。しかし家住の提示する形には、認めるべき自身の姿や周りの空間が映し出されることはない。家住が生じさせた表層の凹凸によって、私たちの目の前に新たな像となって現れるのである。私たちは、映し出された不可解な像を追って自らも動き、そのものを認識しようと試みる。映し出されるはずの自分自身はどこにいるのか、あるいはここは何処なのか。認識すべき対象を追い求めてゆらぐ表層のなかにひき込まれてゆくのである。家住の造形が映し出す像は、鑑賞者に見ることの好奇心や自らの認識が揺るがされることへの不安感、それらを満たすあるいは払拭するための行動をも誘発するのである。

削りから得られる感触と形

「Projection プロジェクション」シリーズにも見られるように、1995年以降、家住の削りにおける技術が向上するに従い、彼の感覚が活かされた自由な発想による形の制作が可能となってゆく。それまで直方体の表面にあらわされた緩やかなゆらぎや凹凸は、物体として姿を現しはじめるのである。

1996年より制作される「Vessel ベッセル」シリーズでは、それまで多用された直方体から器状のかたちの造形へと変化する。「表面の凹凸だけを見せたいと思った」と述べる家住は、直方体のエッジをそぎ落とし、上部から下部へと器のように弧を描くシンプルなフォルムを形づくることで、表面の凹凸を際立たせた。熱線反射板ガラスの使用により、光は形の奥へ浸透することなく、波紋のように広がる表層の凹凸をなぞるように反射する。家住の緻密な削りと磨きの仕事は、人の手によるものとは思えないような自然なゆらぎを生じさせ、静謐な佇まいを生み出している。本シリーズの中には「水の器」と題される作品もあり、内側から水を湛える器を想起させ、外側へと柔らかく広がる表層を目にした時、鑑賞者は「触れて、その感触を確かめてみたい」という思いに駆られるのではないだろうか。

2000年に入り制作が開始された「Move(ムーヴ)」シリーズは、「Projection(プロジェクション)」シリーズから展開した作品群である。「Projection(プロジェクション)」シリーズで壁面へと配され

ていた形は、「Move(ムーヴ)」シリーズにおいて空間の中で自立しうねりを伴いながら立ち上がる。様々な動きを見せる本シリーズは、それまで円や楕円、直方体という幾何学形態の中に内在した凹凸やゆらぎを、物体として捉えなおし造形化したものである。家住はそれまで、積層によってガラス内部に現れる断面を意識的に排した形に取り組んだが、本シリーズでは造形の内部空間に見え隠れする断面が、外側のフォルムと交差するなど複雑な動きを見せる。さらに熱線反射板ガラスの使用によって、光の反射が加わり、周囲の空間が映し出されてゆく。このように「Move(ムーヴ)」シリーズは家住の削りによって生じる、全体のフォルム、内部空間に現れる断面、形に映し出される像という三つの要素がもつそれぞれの動きが、多層的に重なりあうことで形を成している。

1998年から近年まで展開される「Form(フォーム)」シリーズは、柔らかく透き通る形が豊かな量感を湛え、深い緑色を帯びる。家住は「でっぱりとへこみ」シリーズから多用してきた熱線反射板ガラスを使用せず、板ガラスのみの積層による直方体を制作し、研削と磨きによって丸みを帯びた有機的な形を生み出している。ハンドグラインダーの加工において、家住は高速で回転するダイヤモンドブレード(3)の動きと呼吸を合わせ、ガラスを削る力加減を強めたり弱めたりしながら研削してゆく。彼はこのような制作過程の中で

(3) ダイヤモンドブレードについて家住は以下のように記述する。

金属の台金(厚み1~2mm)の外周部に、ダイヤモンド砥粒を含んだ金属がチップ状に配置しており、主に石材やコンクリートの切断、研削に使用される。ガラスの切断、研削にも使用できる。

削られてゆくガラスの感触を確かめながら、自らが求める形を探り出すのである。粗削りの段階において石のように硬質で白く不透明である形は、磨きを重ねることによって、水のように柔らかく透き通り、深く緑色を帯びる形へと変化する。彼は自らの想像を超えてゆく姿形の変化を目の当たりにした時、常に新鮮な驚きを覚えるという。「何か変だ、変だなと思いながら削っていく」と述べる家住は、物体に対する問いを重ね、幾度も削りと磨きを繰り返すことで、その形を生みだしてゆく。彼は削りの感触について「豆腐のよう」あるいは「やわらかく感じる」と述べており、「Formフォーム」シリーズは、家住が削りの際に素材から得た感触が、形に反映されているとも考えられる。鑑賞者は、透きとあり豊かな量感を湛える柔らかな形を目にした時、それが柔らかいのか硬いのか、軽いのか重いのかを、触れて確認してみたいのではないだろうか。近年においては、内部に鏡を加えるなどし「Formフォーム」シリーズに新たな展開が見られる。

まとめ

物事を一義的に捉えることなく、多様な視野に立って考察する家住にとって、板ガラスとの出会いは決して偶然ではなく、必然的に導かれた素材なのかもしれない。

板ガラスは積層することで形に内部空間を生みだし、透き通る深い色みを帯びる。ガラスの積層に、家住が削りと磨きを加えることで凹凸やゆらぎが生じ、形や色、映し出される像に動きがもたらされる。

積層したガラスから何らかの形を捉えようとする家住の制作行為は、「何か変だ」という素朴な疑問に対して答えを探す営みでもある。その問いは生み出された形や、その形に映し出される像に反映され、私たちにも問いかける。「これは何だろう、何か変である。」

私たちは目の前にある謎に満ちた形に対して、自らの視覚や触覚で認識したいという思いにかられる。見ることや触れることで、存在を確認しようとする人間の根源的な欲求を触発するのである。

家住が生み出す形は、私たち自身や私たちの生きる世界を、ユーモラスに時にはいびつに映し出す。彼の提示する形をみつめていると、そこに彼の自由な精神が宿っていることに気付かされるのである。この世界を自らの備わる感覚で捉えてゆくこと、その重要性を発しているように思う。

富山市郷土博物館学芸員 中川靖子

「家住利男 削りの形」展覧会カタログ

富山ガラス美術館 2017 | pp.17-19